７　宮滝遺跡出土品（有形文化財（考古資料））

１，６２１点（縄文土器１，２７４点、石器３４７点）

出土地　吉野町宮滝
所在地　吉野歴史資料館（吉野町宮滝 348 番地）
所有者　吉野町
時　代　縄文時代

宮滝遺跡は、吉野川右岸の河岸段丘に位置する縄文時代から中世の複合遺跡である。昭和 5 年から１３年にかけておこなわれた末永雅雄による発掘調査で出土した縄文時代資料には、縄文時代中期終末から晩期終末にかけての豊富な縄文土器、狩猟採集生活を伝える石鏃、石皿、すり石等の石器、縄文時代農耕との係わりが注目される打製石斧や、祭祀遺物である石棒がある。

このうち、縄文時代後期終末の土器群は、「宮滝式」とよばれる土器型式の標式資料で、深鉢、浅鉢、注口土器で構成される。深鉢は多段に屈曲する体部を特徴とし、口縁部には波状口縁と水平口縁がある。土器文様にはさらに特徴があり、施文には海生巻貝であるヘナタリを用い、扇状圧痕文と凹線文を多用する。ヘナタリが得られる宮滝遺跡に最も近い海は紀ノ川河口部であり、約７０㎞隔たっている。また宮滝式土器に類似する土器の分布は、広く西日本地域に及んでおり、広域に及ぶ地域間交流の存在が推定される。

宮滝遺跡出土品は、奈良県における縄文時代研究の先駆けとなった資料であるのみでなく、縄文時代の広域交流を示す資料である。また縄文時代後期終末の土器群は、宮滝式土器の標式資料として、学術的に重要な位置を占める。